

社会的実践力に培う高等学校コミュニケーション教育の研究

ー実用的言語コミュニケーション能力を育成する
授業開発をもとめてー

学籍番号 209312

氏名 竹田 彩子

主指導教員 土山 和久

副指導教員 成實 朋子

1. 研究の背景と課題の設定

後期中等教育課程を終えた若者たちの多くは、職業的コミュニケーションが必要な世界に参加していく。高校生や専門学校生などの学習者集団で、教養にとどまらない"実の場"に即した職業的コミュニケーションの資質・能力開発の試みが求められている。本研究において、日本の後期中等普通教育学校等の国語科における、実用的言語コミュニケーション能力育成を目指した授業実践開発を構想する。ここで得られた言語活動実践や成果物に関して、資質・能力ベースの学力観から照射した際に、立ち現れる特質を明らかにすることを、本研究の目的とする。

2. 授業モデルとしての実践的コミュニケーションの構想

授業モデルの基盤として、ドイツ職業教育学校のドイツ語/コミュニケーション科の教育について考察し、我が国の国語教育への援用可能性について構想した。また、職業学校での実践研究のデータを得るため、実習校の大阪府の普通科高等学校に加えて、看護専門学校で授業実践に取り組んだ。特に、バーデン・ヴュルテンベルク(BW)州職業専門学校の、学習指導要領にあたる教育プランを参照し、「話すことと傾聴すること」領域の教育プラン上の規定に着目した。

3. 実習校における学習者たちの学びのコミュニケーション意識

実習校での予備調査の分析等によると、多くの学習者が、対話者から自分たちが知りたい情報を得られるように「話す/聞く」ことが、難しいと答えている(31.5%)。

高校生や専門学校生など、これから社会に出ていく10代の国語学習者の職業的/対話的コミュニケーションのつまづきに対し、オーセンティックなコミュニケーション教材を援用した単元に取り組ませることが有効なのではないかと推測した。

4. 学習の技術としての「1人称メッセージ」

発展課題実習IIにおいて、「1人称メッセージ」に関するワークショップ型授業実践に取り組

んだ。学習者のふりかえりによると、「1人称メッセージ」のスキルが課題解決的な対話を目指していることを把握し、実践的/実用的な発話形式に関心を寄せていた。また学習者なりに、どのようなコミュニケーション場面でこのスキルを生かせるのか、構想するに至っていた。ただし、厳しく切実な必要性に迫られ、課題解決のための言動をとらねばならないような利害得失型コミュニケーション状況を想定させることが、実習校の高校1年生にとって難しいという点が顕わになった。

5. 実用的コミュニケーション・スキルとしての「フィードバックを与えること/受け取ること」

第4章に続く主題として、「フィードバックを与えること/受け取ること」を扱う授業実践を、実習校の高等学校1年生対象に実施した。本単元を通じて、学習者が実践的なコミュニケーション能力を発揮する、出力調整弁をコントロールする資質・能力を養うことをねらいとした。

後期中等教育の国語科「伝え合うこと」の領域においては、従来情意的かつ定性的な価値が語られることが多かったが、学習者から、本単元はお互いにとっての「利益」を指向するコミュニケーション・スキルであるという気づきが見出された。

6. 職業的コミュニケーション・コンピテンシー育成の場における検証

職業学校でのデータを得るため、大阪府下の看護専門学校で授業実践をおこなった。オーセンティックな言語活動として、二つのコミュニケーション教育単元を実施した。一つは、「専門学校説明会で、見学者に向けた歓迎のスピーチを構想する」という単元である。二つめに、「さまざまな場面で電話対応をする」課題状況設定で、ロールプレイをおこなった。学習者たちは、職業場面でのコミュニケーションについての切実な実感を携えて、「話すことと傾聴すること」のコンピテンシーを、有機的・同時進行的に駆使しながら言語活動ができたとみられる。ただし、学習者の置かれた前提状況によって、学習課題への反応の様相が異なる。授業者として、学習者の発達段階を十分考慮し、よく吟味されたタスクを配置しなければならない。

7. 最終考察と全体的な今後の展望

本研究において、授業実践のモデル基盤として、ドイツ・BW州の「話すことと傾聴すること」のコンピテンシー規定を示し、日本の高等学校、および職業専門学校への援用可能性を探る試みを行った。日本の普通科高等学校においては、オーセンティックなコミュニケーション実践の場を確保することが非常に難しいという課題が残された。また、国語科のカリキュラム全体を俯瞰して包括的に取り扱うような枠組を見出すには至らなかった。

本研究は、職業的・対話的コミュニケーションのための言語使用を耕すプログラムに、拠って立つものであり、これらのプログラムは、日本の後期中等教育においても職業教育の現場においても、ある程度機能する見込みを得られたことが、一つの成果である。コミュニケーションの実の場で、言語行為・言語技術を「機能させていく」体験を、いかに教育として積み重ねられるかが肝要である。その成否によって、現状のコンテンツ・ベースの、高等学校国語科教育の立ち位置がコンピテンシー・ベースへ遷移していく可能性がひらかれていくのではないかと。